事例 2

# 未然防止・早期支援の施策をいち早く推進し、校内サポートルームを全市立小学校に設置

## 埼玉県 戸田市教育委員会

戸田市教育委員会は2022年3月、「戸田型オルタナティブ・プラン～誰一人取り残されない教育の実現～」を策定した。校内サポートルームや仮想空間メタバースを活用したオンライン教育支援センターなど、多様な学びの場の整備に力を入れた、総合的な不登校施策だ。部局横断で統合した子ども一人ひとりのデータベースなどを基に、AIが不登校のリスクを予測するシステムを全市立学校に配備するなど、客観的な根拠に基づく不登校の早期発見・支援にも取り組んでいる。

**自治体概要**

埼玉県南東部に位置する。教育委員会内に教育政策シンクタンクを設置し、EBPM（客観的な根拠に基づく政策立案）を推進。「21世紀型スキル」や「非認知（社会情動的）スキル」の育成を目指す。産官学連携も積極的に展開し、教科教育の充実に加え、EdTechやPBLなど新たな学びにも取り組む。

人口 約14万2,000人　面積 18.19㎢
市立学校数 小学校12校、中学校6校
児童生徒数 小学校7,887人、中学校3,690人
教員数 973人　スクールカウンセラー 県費4人、市費15人
スクールソーシャルワーカー 4人
校内教育支援センター 12か所　教育支援センター 2か所

### 「誰一人取り残されない教育」の実現を目指す

戸田市教育委員会（以下、市教委）は、2022年3月、**「戸田型オルタナティブ・プラン～誰一人取り残されない教育の実現～」**を策定し、不登校への総合的な施策を実行している。その背景には、同市の不登校の児童生徒の割合が、2017年度は1.1%だったのに対し、2020年度は1.7%*と増え続けている状況があると、戸ヶ﨑勤教育長は述べる。

「本市では、10年ほど前から産官学連携やデータに基づく施策を推進し、子どもの学力や体力の向上、非行問題行動の減少などを実現してきました。不登校の施策にも取り組んできており、不登校児童生徒が増加傾向にある状況は、本市の大きな教育課題の1つと位置づけています」

不登校児童生徒への支援の大前提は、「学校復帰」ではなく「社会的な自立」だ。一方で、「学校に戻れるに越したことはない」という考えも併せ持つ。

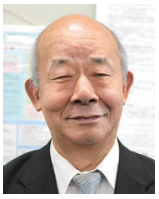
「学校の役割が学習面だけなら、その機能を代替する場を整えることで対応できます。しかし、学校には民主主義を担う主権者の育成という存在理由もあることを念頭に置いて、一人ひとりを支える施策を充実させたいと考えています」（戸ヶ﨑教育長）

### 不登校児童生徒の学内外の居場所を増やす

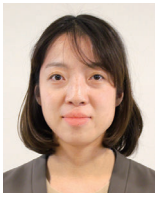
同プランの柱の1つは、多様な学びの場の整備だ（**P.13図**）。それまでの不登校児童生徒への支援は、**教育支援センター「すてっぷ」**を拠点とし、スクールカウンセラー（SC）などが児童生徒や保護者からの相談を受ける**「さわやか相談室」**を全市立中学校に設置することで進めてきた。しかし、「登校できるが教室に入れない」「家から出られない」など、不登校児童生徒それぞれの状況が異なることを考慮し、より個別のケースに対応できるように取り組みを拡充した。

2022年度に新設した施設の1つが、不登校傾向にある小学生に早期支援を行う**校内サポートルーム「ぱれっとルーム」**（**P.14実践事例**）だ。何らかの理由により教室に居づらい子どもが訪れて学習などをする場所で、一時的に気持ちを落ち着ける居場所や教育相談の場としても利用されている。4月に市立小学校3校で試行すると明らかな効果が見られたため、同年11月までに市立小学校全12校に設置した。教育政策室で政策担当を務める藤本恵美主事は、次のように説明する。

「学校に来られなかった子どもが『ぱれっとルームなら通える』と登校



教育長
**戸ヶ﨑 勤**
とがさき・つとむ
2015年度から現職。第12期中央教育審議会委員。内閣官房「教育再生実行会議技術革新WG」有識者会議等に参画。



教育政策室 政策担当
主事兼指導主事
**藤本恵美**
ふじもと・えみ
2018年度から現職。

＊ 文部科学省「令和2年度　児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」による。

図 「戸田型オルタナティブ・プラン」 多様な学びの場を整備

**小学校**

**校内サポートルーム「ぱれっとルーム」**

教室に入りづらい子どもの学びや活動の場、一時的な居場所、保護者の相談の場として活用。2022年度、全市立小学校に設置。

**中学校**

**さわやか相談室**

スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、ボランティア相談員などが、中学生から様々な相談を受ける。現在、学習支援の場としても併用している。全市立中学校に設置。

**自宅**

自宅からオンラインで授業やテストを受けられる環境を整備

**埼玉県立戸田翔陽高校内**

**生徒支援教室「いっぽ」**

高校教員が不登校の中学生に学習支援を行うほか、スクールカウンセラーによる相談や不登校を経験した高校生との交流会などを実施。

**メタバース**

**シェア型オンライン教育支援センター「room-K」**

不登校児童生徒が自宅からアクセスできるメタバース空間で、安心・安全な学びの場を提供。認定特定非営利活動法人カタリバと連携して運営。スタッフと児童生徒が定期的に面談し、一人ひとりに合った支援計画・学習計画を作成して支援する。保護者のサポートも行う。

**戸田市教育センター**

**教育支援センター「すてっぷ」**

不登校児童生徒を支援する拠点として、民間委託による学習支援プログラムを提供。アウトリーチ型の支援も行う。市内2か所に設置。

※戸田市教育委員会の提供資料を基に編集部で作成。

を再開するなどのケースが相次いで見られました。首長部局もその効果を理解し、急きょ補正予算を組んで設置を拡大しました」

現在は小学校のみの設置だが、今後、同様の機能を中学校にも持たせることを検討中だ。

不登校の中学生への支援としては、2022年10月、埼玉県教育委員会と連携し、埼玉県立戸田翔陽（しょうよう）高校内に**生徒支援教室「いっぽ」**を開設した。高校教員が生徒それぞれのペースでの学びを支援するほか、SCによる悩み相談や、不登校を経験した先輩との交流会を行っている。

「高校内にあるため、中学校に通えない生徒も高校進学をイメージしやすいのが大きな利点です。同校は午前部・午後部・夜間部の三部制で、自分に合う学びの形態を選びやすいこともあり、これまでに利用した5人のうち4人が同校に進学しました」（藤本主事）

## メタバースに設けられた学びの場に自宅からアクセス

家から出られない児童生徒の新たな居場所として導入したのが、自治体を超えて参画できる**シェア型オンライン教育支援センター「room-K」**だ。認定特定非営利活動法人カタリバと協働で立ち上げたプログラムで、子どもは自宅からタブレット端末などでroom-Kにアクセスし、仮想空間メタバースで学習や活動に取り組む。

利用開始時には、room-Kのスタッフが子どもとオンライン会議ツールで面談し、個別の学習プログラムを作成。room-K内では、自分の分身となるアバターを移動させて、教室に入ってデジタルドリルに取り組んだり、プログラミングや絵画、工作などのクラブ活動に取り組んだりする（**写真1**）。スタッフのいるスペースを訪れて、相談することも可能だ。

「room-Kによって、家に閉じこもって教員との面談に応じようとしない子どもなどにも支援を届けられる可能性があります。オンライン会議ツールでの面談では、顔を出すかどうかを本人に選んでもらうようにするなど、子ども一人ひとりの状態に応じて参加形態を変えられます。ある中学生は、room-Kを通して他者とのコミュニケーションに徐々に慣れていき、やがてさわやか相談室を訪問するようになりました」（藤本主事）

2023年には教育支援センター「すてっぷ」を新たに1か所増設し、2か所とも民間委託で運営している。

「以前は退職した学校職員に運営を依頼していましたが、どうしても指導の色合いが濃くなってしまい、学校と同じような雰囲気になじめない子どももいました。民間のノウハウを活用して魅力的な学びのプログラムを提供することで、利用者が増えています」（藤本主事）

**写真1** room-Kには個別型と集団型の学び方があり、子どもが自分に合った学び方を選べる。参加者が描いた絵を互いに見せ合うグループワークなど、様々な形の学びを展開している。

## 多様な個人データを基にAIが不登校リスクを発見

市教委が多様な学びの場の拡充とともに重視しているのが、データの活用だ。戸田市教育政策シンクタンクと連携し、2022年9月に不登校の予防・支援を科学的な視点から進める**不登校対策ラボラトリー「ぱれっとラボ」**を設立。委嘱された外部研究員6人が、不登校に関する調査・分析・研究・評価を行う。

2022年度には、デジタル庁の実証事業として、部局や組織ごとに管理していた子どもの個人データを統合した「教育総合データベース」を構築。学校の出欠の状況、学力テストの結果、保健室の利用状況、いじめに関する記録などのデータをダッシュボードで確認できるようにした。そして2023年度には、データベースと子どもが毎日端末に入力する心身の状態などを踏まえて、AIが不登校の兆候を発見するとダッシュボードに表示するシステムを、全市立学校に配備した。

「子どものSOSを早期発見し、プッシュ型支援につなげることが目的です。教員が子どもに接する中で感じたこととAIによる判定はほとんど一致しますが、意外な子どものリスクが高く示される場合もあります。新たな視点から不登校の予防につなげることができています」(藤本主事)

そうした取り組みとともに大切にしているのは、誰もが通いたくなる魅力あふれる学校の実現だ。

「子どもが学校に未来を感じ、楽しくて、やりたいことがたくさんあり、安心して学べる場となれば、不登校は減っていくはずです。『凡庸な90点を目指すより、60点でも夢のある挑戦を』という思いで、よい取り組みだと信じたら、失敗を恐れずに挑戦を続けていきます」(戸ヶ﨑教育長)

実践事例

## 教室に行きづらい子どもに心理的安全性を提供する空間を確保

### 戸田市立笹目(ささめ)東小学校　校内サポートルーム「ぱれっとルーム」

#### 個々の状態により、利用の仕方は様々

戸田市立笹目東小学校では、2022年11月に校内サポートルーム「ぱれっとルーム」を設置した(**写真2**)。利用の仕方は子どもによって様々で、毎朝直接部屋に来て下校時刻まで過ごす子どももいれば、朝や給食の時間だけ過ごす子ども、苦しくなった時に一時的に利用する子どももいる。

来室時には、見守りを担当するスクールサポーターと、その日の心の状態や取り組むこと、参加できそうな授業などについて話し合う。「自分が何に苦手や不安を感じているのか、少しずつ理解できるようにして、教室に行ける機会を増やしていきます」と、スクールサポーターの宮﨑仁美さんは語る。

**写真2**　ぱれっとルームにはスクールサポーターが常駐。指導はせず、学習や活動に取り組む子どもを見守る。1人で過ごすための個別ブースもある。

来室した子どものクラスとオンラインでつなぎ、子どもが担任と話したり、オンラインで授業を受けたりすることもある。給食は子どもが教室まで取りに行くようにし、友人や教員との交流をできるだけ保てるようにしている。

#### 「心の充電」ができる場所

ぱれっとルームで過ごして「心の充電」をし、教室に戻っていくケースは多い。以前は長期休業明けの「登校しぶり」が不登校につながることもあったが、ぱれっとルームで1週間ほど過ごした後、毎日登校するようになったケースがあった。また、感情のコントロールが難しいという理由で利用していた子どもは、教室でイライラしそうになると、「ぱれっとルームに行ってくる」と自分の状態に合わせて利用できるようになったという。

ぱれっとルーム担当
**宮﨑仁美**
みやざき・ひとみ
スクールサポーター(会計年度任用職員)。

◎**学校概要**　**児童数** 606人
**学級数** 23学級(うち特別支援学級4)
◎**ぱれっとルーム概要**　**常駐職員** 1人
**利用者数** 延べ39人(2023年度)

「苦しくなった時にここでひと休みをして、次に進む準備をする姿が見られます。教室に戻った後も『何かあったら、またここに来ればいい』と思える、“お守り”のような場所になっています」(宮﨑さん)

Web VIEWnext ONLINE
取り組みの詳細をウェブサイトで紹介しています。右記の2次元コードからアクセスしてください。